

No. J2326

国際会議:Religious and Theological Responses to Environmental
Disaster in Asian History

早稲田大学高等研究所 講師
James Harry MORRIS

アジア太平洋地域全体の環境問題に対する宗教的対応について、2024年1月27日、28日の2日間、早稲田大学高等研究所で国際シンポジウムを開催した。人類学、歴史学、宗教学、哲学など多様な学問分野で活躍する研究者15名（男性8名、女性7名）が7カ国から集まり、10ヶ所の異なる地域（中国、中央アジア、インド、インドネシア、日本、韓国、モンゴル、ネパール、太平洋諸島、ベトナム）に関する研究成果を発表し、ディスカッションを行なった。学内外の研究者や学生が来場およびオンラインで19名参加した。

多様な研究者による発表から、いくつかのテーマと課題が浮かび上がった。第一に、伝統的な年代学に対する理解への挑戦である。過去の環境災害は物理的な環境への影響を超えて、人間社会や人間の思想へ長期的な影響を与え続けていることが示された。第二に、災害を自然災害か人為的災害かに分類することへの挑戦があった。災害は常に自然的要素と人間的要素による産物であり、その解釈やそれに伴う行動も含まれることが示唆された。最後に、単一原因論の欠如が見られた。各発表者は、災害とそれに対する宗教的対応をさまざまな視点から複数の相補的で対立的な真実の存在を強調した。

併せて、災害に対する宗教的反応を、以下のように分類することができた。

1. 神義論—— 災害がなぜ起こったのかを説明しようとするもの。
2. 儀式—— 減災や予防、悲しみにまつわる儀式など、宗教的な個人やコミュニティが災害に対してとる行動である。
3. 批評と動員—— 社会的・政治的批評と変革のために動員される試み。

シンポジウムで発表された論文は論集として出版し、より広く学者や一般の方々へ発する予定である。